

編集後記

WASEDA RILAS JOURNAL No.9 をお届けします。

本号も多様な専門分野の多彩な論文を掲載することとなりました。本号は一般投稿 29 本、研究ノート・報告・翻訳 2 本、部門特集 2 部門、開催報告 2 本、および、活動報告と、前号以前に引き続き、充実した内容となりました。ご寄稿くださった皆様、査読にあたられた諸先生方、編集の実務を担当された助手の皆様、さらにはこれらの活動を支えてくださった学術院事務所の関係各位に、まずは、お礼を申し上げます。

本号の内容は、早稲田大学総合人文科学研究センターと各研究部門が、この難しい状況においても、研究活動を維持し、その意欲に衰えがないことを示しています。センター前副所長であり、部門代表者である伊川健二教授による「国性爺合戦にみる異国観」に始まる 29 本という実に多くの論文は、そのテーマも多岐にわたります。これは、人文社会の領域の広さを反映しています。

特集は 2 研究部門からの開催報告及び論文による構成となりました。特集 1「トランスナショナル社会と日本文化」部門は、主催研究会「近代北方史の動態を探る—北海道開拓と民衆経験—」とシンポジウムと「日琉関係史の軌跡と展望—紙屋敦之氏の研究を中心に—」の報告がなされ、それぞれのテーマに関する論文を投稿していただきました。日本の北と南に関するまさにトランスナショナルな視点を読み取っていただけるのではないかと思います。また、紙屋敦之先生が行った研究に注目し、共有することにより、本研究センターが知の継承の場としても活用されていることに意義を感じます。特集 2 は早稲田大学総合人文科学研究センター 2020 年度年次フォーラムをオンラインで主催した「現代社会における危機の解明と共生社会創出に向けた研究」部門からの東日本大震災の復興に関するテーマの投稿を 2 本掲載しております。これらの研究には震災に匹敵する非常時である昨今の世界をとりまく状況を重ねながら読むことができるのではないかと思います。いずれの部門も昨年に引き続き、特集を通して、旺盛な研究の発表をさせていただいており、本ジャーナルの研究交流と発信の役割を高めて頂いております。

かつて本誌の創刊に際して、オンライン・ジャーナルという形式を取ることに、かなりの議論が交わされたと聞いております。今や、センターの年次フォーラムがオンラインで行われるこの時代に、先見の明を持たれ、オンライン形式でのジャーナル創刊にご尽力された方々に頭が下がる思いです。そして、第 9 号となる本誌では、掲載論文数とその創刊以来最多となったことを大変喜ばしく思います。これは、本センターにおいて研究が盛んに行われている確固たる証と言えるでしょう。しかしながら、今回、特集部門が 2 件に止まったことは、残念ながら、様々な「パンデミック対応」によってもたらされた研究成果の共有方法の変化による影響によるものと思われます。今後も、本ジャーナルが新しい研究の世界の形成を積極的に牽引していくためにも、論文だけでなく、研究ノート・報告・翻刻・翻訳など、様々な形の投稿を期待しております。

(早稲田大学総合人文科学研究センター副所長 ライアン スティーブン)